

トルティーヤチップスとサルサ

重いカーテンの縁から、ほんの少し外の光が漏れる。四角形に切り取られた間接照明は、バーソロミューたちのいるソファまではその光を送っていない。とろりとしたシフォン布のような闇を超えてソファに届くのは、画面からの光だ。ばらばらと動く画面を、バーソロミューは見ている。その腿に黒髭の頭を乗せたまま。

「……命日はまだ先だったよな」

「今日のもげてないですー」

つぶやきに応えが返る。大きな手がバーソロミューの膝をぺし、と叩いた。ソファからはみ出している足が、不満げにゆらゆらと揺れる。

ライムを押し込んだビール。大皿に開けたトルティーヤチップス。その脇には、雑に盛りつけたサルサソース。ソファに近寄せたミニテーブルに乗せたそれらをつまみながら、何度も繰り返し見た映画を見ていた。

「んあ」

黒髭が大きく口を開けた。バーソロミューはソースを少し掬い、チップスを突っ込む。同じ皿に盛っていたせいで、チップスはソースの水気を吸っていた。ふにやりとしたそれは、黒髭の口で噛み砕かれる音もたてずに消えた。すぐ次を強請る口に、今度はソースに浸かっている

チップスを選んでつまみ入れる。

バーソロミューが給餌する間も、黒髭の手は枕にした腿をがっちりと掴んでいた。視線は画面を向いているが、そこに熱心さはない。寝そべったまま咀嚼する黒髭に、テーブルに置かれたままのビールを示す。

「飲まないのか？」

「んー……」

黒髭はわずかに首をもたげたが、結局面倒臭そうにまた頬をバーソロミューの腿へ押し付けた。今日の黒髭はずっとこんな調子だ。ふらりと部屋に來たと思えば勝手にバーソロミューの備蓄を開け始め、文句を言う部屋主を捕まえて枕兼給餌機としてソファに据えつけた。それからぼんやりと映画を眺め、時折バーソロミューの膝や腿を撫でるだけ。

軽く鼻を鳴らしたバーソロミューは、それでも黒髭をはたき落とす事はしない。ばかりと口が開けば、そこへ次のチップスを入れてやる。大きさは全然違うのに、まるで雛鳥だ。腿にかかる重みも、髭のこそばゆい感覚も、拒否する理由にはなる。……なるが、それを選択しない程度には、バーソロミューもこの大きく可愛い男に絆されているのだった。

バーソロミューの指先が、豊かに茂った口髭を撫でる。人差し指と親指で挟み、軽く引くと赤色のソースがついた。バーソロミューは舌を出し、ゆっくりと人差し指に触れさせる。下から上へ。人差し指のソースがなくなると、親指を口に入れてわざとらしく下品な音を立てる。

「うめえか？」

気がつけば、黒い瞳がバーソロミューを見上げている。この男に見上げられる機会は多くない。バーソロミューはサルサソースのように赤い舌で笑った。

バーソロミューが何事かを返答した後その脚は軽くなり、放置されたトルティーヤチップスはすっかりと汁を吸って湿ってしまった。